

## オーディオ実験室収載

### バランスアナログアキュライザーの導入(3) ーバランスアナログアキュライザーの試聴(2)ー

#### 1. 始めに

前報(2)に引き続き、バランスタイプのアナログアキュライザーBACU-2000の試聴を行っていきます。

#### 2. バランスアナログアキュライザーの試聴方法

今回は音源としてCDの再生を行います。

現在、CDトランスポートはPhilipsのLHH-1001を使用し、次の経路で再生しています。この経過は、[アナログアキュライザーの活用\(20\)](#)と[アナログアキュライザーの活用\(21\)](#)で報告しています。

現行ルート

LHH-1001→CCV-5→DACU-500→DAC-1→ExPro SV-1→AACU-1000→DA-3000

今回、BACU-1000を使用するために次のように経路を変更します。

ルートA

LHH-1001→CCV-5→DACU-500→DAC-1→ExPro SV-1→Sonica DAC→

BACU-2000→DA-3000

ルートB

LHH-1001→CCV-5→DACU-500→DAC-1→ExPro SV-1→AACU-1000→

Sonica DAC→BACU-2000→DA-3000

即ち、いったんSonica DACにLINE入力し、Sonica DACのバランス出力をBACU-2000経由でDA-3000に入力します。

ルートAとルートBの違いは、ExPro SV-1とSonica DACの間にAACU-1000が介在するか（ルートB）、介在しない（ルートA）ことです。

まわりくどい経路ですが、これでルートAではBACU-2000の効果が分かり、ルートBではAACU-1000の効果にBACU-2000の効果が加わることになります。

#### 3. バランスアナログアキュライザーの結果

試聴の手順として、まずは、現行ルートで聴いておき、ルートAに繋ぎ替えます。

次いで、ルートAにAACU-1000を追加してルートBにします。

試聴するCDは[ベートーベンのチェロソナタ](#)、[モーツァルトのピアノ5重奏](#)、マーラーの交響曲3番、および[有山麻衣子](#)です。ベートーベンのチェロソナタとモーツァルトのピアノ5重奏の演奏は演奏会でも聴いていますし、マーラーの交響曲3番

と有山麻衣子は聴きなれたものです。

予想としては、現行ルートに対し、ルート A は、Sonica DAC がアンバランス入力をバランス出力に変換するだけのラインアンプのようなかたちで余分に介在するので、本来の BACU-2000 の効果が出ないのではないか、むしろ音質が劣化するかもしれないと危惧していました。ところが、この予想に反し、その差は歴然と現れました。

ベートーベンのチェロソナタは、スタンウェイ、モーツァルトのピアノ 5 重奏は古楽アンサンブルなのでフォルテピアノ、有山麻衣子のピアノはブリュートナーですが、倍音領域まで忠実に再現されるせいか、それぞれの特徴が如実に分かります。特にフォルテピアノは芯のある響きが、演奏会の記憶さながらに蘇ります。また、マーラーの冒頭のホルンとピアノ 5 重奏のナチュラルホルン、マーラーのクラリネットとピアノ 5 重奏のバセットクラリネットの違いも良く分かります。有山麻衣子については、[インフラノイズ社のブログ](#)にも引用されていますが、細身の透き通った声が身上かと思っていましたが、意外にも生の声のような力強さも感じられました。

ルート B は、ルート A に対し、アンバランスラインに AACU-1000 が追加されるわけですが、BACU-2000 のような顕著な効果の追加までは至りませんが、AACU-1000 単独の効果である、音場表現の深化や楽器の質感の自然さ、音の分離と協和が加わったことが認められ、ここまでくると、CD 再生ではこれまでに聴いたことのないレベルに達しました。

#### 4. まとめ

CD 再生についてアンバランス入力をバランス出力に変換するラインアンプの介在を行いました。バランスラインでの BACU-2000 の効果を認め、さらにアンバランスラインに AACU-1000 を追加する効果も認めました。

以上